

恵那山学会ニュース 第8号 2008-1-15



イイギリ(けやき平)

恵那山学会

<http://www.enasan.info/>

〒508-0011

岐阜県中津川市駒場 398-8

金井 方

新年明けまして おめでとうございます

恵那山を読み解く 恵那山学会

恵那山学会は、今年4月で創立満3年になります。発足以来、会員の皆さんはもとより、一般の皆さんのご支援、ご協力によって、進むべき方向を模索しながらも地道な活動を続けてまいりました。

今年も植物観察など、地道な中にも新機軸を打ち出し、楽しくて価値ある活動を展開したいと考えております。一層のご支援ご協力をお願い致します。

(会長 金井 孝素)

恵那山学会全体会議

下記により全体会議を行いますので、都合をつけてご出席ください。

議題は主として来年度の活動方針の概要を提案していただき、検討します。

日時 2月17日(日) 14:00から17:00

場所 中津川中央公民館

“恵那山研究”原稿募集

恵那山学会誌“恵那山研究”の原稿を募集中です。名前は硬いですが、内容は気軽なものを歓迎しています。気軽なもの集積が価値あるものになると信じています。

会員の皆さんだけでなく、会員外からの寄稿も受け付けています。

送り先：上杉 毅 さん 〒489-0031 愛知県瀬戸市五位塚町 11-314

メール：u190957@infoseek.jp (半角)

FAX・TEL：0561-83-2214

恵那山画廊を開設しました / (<http://www.enasan.info/>)

恵那山学会のホームページでは、吉村唯七画伯の恵那山の絵画を展示してきましたが、これを改装して“恵那山画廊”として、新しく開設しました。

島崎廣美 画伯のパステル画 8点を追加

島崎廣美画伯と中津川市の額装工房アートランド様のご好意により、恵那山のパステル画を展示しました。

島崎廣美画伯略歴

中津川市神坂在住

昭和15年生まれ

昭和40年より昭和59年まで吉村画塾(吉村唯七主宰)で学ぶ

師亡きあと独学でパステル画の技法を取得

個展(アートランド他)を主体にパステル作品を発表

ぜひ お立ち寄りください!!

原稿募集

恵那山学会ニュースは、会員相互の情報交換紙です。日常のちょっとした情報でも結構です。お気軽に投稿してください。(金井宛・電子メール、FAX、郵便など)

田畑さんや張山さんの大作がありますが、短文でも結構ですので、臆せず、どんどんお寄せください。恵那山学会ニュースの体裁は、基本的に横書きとします。

ウエストンと美濃の恵那山

田畑真一

1896(明治29)年、英国人宣教師・ウエストン(1861-1940)が著書『日本アルプス-登山と探検』(英文)を刊行した。これは彼が滞日中、登山した山々への記録をまとめたものだった。

彼は著書のなかで、恵那山については、当初、1か所だけではあるが「美濃の恵那山」と表記した。明治24年8月、木曾駒ヶ岳へ登山した後、伊那谷へ入り、伊那部から時又(現在は飯田市内)にかけてたどったときのことだった。関係の記事をあげておく。

「右手には駒ヶ岳(田畑注、木曾駒ヶ岳)つぎに高さはやや劣るが、やはりどっしりとした美濃の恵那山が道に影を落としている」(青木枝朗訳『日本アルプスの登山と探検』)

彼は恵那山以外の山々にも、「飛騨の笠岳(記者注、笠ヶ岳)」とか、「加賀の白山」(青木訳、前掲書)と表記した例はある。しかし、これら以外の山々には「駿河の富士山」とか、「甲斐の富士山」とか、表記することはなかった。単に槍ヶ岳とか、乗鞍岳・赤石岳というように表記した。恵那山についても、他の箇所では、単に恵那山との表記に終始した。だから、「美濃の恵那山」との表記たるや、特別だったことになる。

では、彼はなぜ恵那山をことさら「美濃の恵那山」と表記したのか。もちろん、「加賀の白山」とか、「飛騨の笠ヶ岳」とかいうわが国古来の国の名を冠した呼称を彼が知っていたという点はある。だが、もう一つの理由もあると考える。それは明治26年5月、彼が恵那山へ登山しようとしたとき、恵那山が所在する「美濃」などの解釈につき、苦慮した経験があったからだ。この経験が彼をして「美濃の恵那山」と言わしめ、表記にもつなげた。私はこう考える。問題の記事をあげておく。

【イイギリの果実はなぜ赤い】けやき平キャンプ場には大きなイイギリの木があり、冬になると赤い果実がモノクロームの森に彩を添える。ただ、この果実、硬くて、苦くて、臭くて鳥も食べないらしい。だから冬の森にいつまでも残っている。

果実が赤くて美味しいのは鳥に種を運んでもらうためだというのが、ラマルク流の「用不要説」だが、イイギリは例外だろうと思っていた。だが、それは素人の浅はかさというもので、実はイイギリの高等戦略だという。あるホームページに書いてあった。

「1つの果実にエネルギーを余分に使わず、少しでもたくさんの果実を付けるという戦略なんです。質より量なんです。そしておいしくないかわりに腐らずに長い間残こし、森に食べ物がなくなる頃になって鳥に食べてもらおうという戦略なんです。」(http://sizenjukunokai.web.fc2.com/neinosato/hana-iigiri.htm)

このイイギリの果実がいつまでも残っているか、確認せねばなるまい。ただ、そんな戦略を考えたのは誰か。

鳥インフルエンザウイルスの変異の話などを聞くと「ウイルス進化説」も捨てがたい。イイギリは病気で遺伝子を犯されて、赤いけれども不味い果実をつけるようになったと。

(金井 孝素)

「東海道線の岐阜駅で降りて、ジンリキシャ(訳者注、人力車)で太田まで行き、そこで一泊するつもりだったが、停車場から出たたん、のそりとした治安の番人(田畑注、巡査)が慇懃に、旅券を見せてほしいと言い、念入りに検査したあげく、それを返しなが、ここから先へ旅行してはいけないと言った。『なぜかですか?』。『なぜかといいますと、皆さんの旅券は、フジ ミ ジュウ サン シュウ(訳者注、富士見十三州)の旅行だけに有効だからです。皆さんが今いるところは美濃の国で、美濃は富士を囲む『十三州』の中に入っていないから、皆さんは旅行できません』(青木訳、前掲書。以下略)

富士見十三州につき、記事中の彼の注釈もあげておく。

富士見十三州というのは、富士の見える十三ヶ国のことで、武蔵、房州、上総、下総、常陸、下野、上野、信州、甲州、遠江、駿河、伊豆、相模である。この十三州が、最近まで外国人旅行者に旅券を発給するさいの一つの区域であった。実際には、あまり知られていないが、富士はもっと遠い地方でも山に登れば見ることができる。槍ヶ岳、飛騨の立山、美濃の恵那山、伊勢の朝熊山(同音だが、火山の浅間山ではない)などがそれである。」

「恵那山は美濃にある。だから、美濃の恵那山だ」彼の心意気も伝わってくるのではないだろうか。私の思いではある。

(日本山岳会資料映像委員)



恵那山雑感 アマテラス大御神

張 山 勇

天照大御神

アマテラスの御神胞は、 なぜ恵那山に納められた？

胞山（胞衣山）は、天照大神の御神胞が納められた処である。と古来より言伝えられてきた。胞山が恵那山と表示されるようになるのは、恐らく和銅6年からだろう。この年、地名には2文字の好字を当てるよう通達が出されている。（続日本紀）

改新の「詔」により、全国が畿内七道に区分され、東山道に美濃（御野・三野・美乃・三乃）国が成立するのは大化2年からで、当時美濃国は15郡で、のち席田郡・石津郡・郡上郡を建て18郡となっている。恵那郡という名の初出は、続日本紀の天平勝宝元年で、三代実録の元慶3年、美濃・信濃国境を栗坂上岑とした際も、美濃国恵那郡とあり、和名抄にも恵那と記されている。

恵那神社が初めて文献（延喜式神名帳）に現れるのは延長5年で、「恵那」の初出は正保の国絵図からといわれている。（恵那神社誌）

胞山も地名に合わせて恵那山、そして恵那山と表示されるようになったのではないか。

胞（胞衣）とは、胎児を包んだ薄い膜と胎盤のことで、胞衣納めの儀式は、産後五日または七日に行われている。外面を胡粉で塗り、雲母で松・竹・鶴・亀などを描いた桶や壺に納めた胞衣を、吉方（恵方・注1）の土中に埋めた。室町時代の記録に、胞衣を埋めた者が笑って帰る「胞衣笑い」という習俗があり、大津や沖縄にも残っているそうだ。（広辞苑）

『徒然草』にも胞衣（後産）が遅れている時の、すみやかに済むようにと、まじないの話（第61段）が記されている。



天照大神(謎の古代女性たち)

注1 恵方（吉方）とは、古くは正月の神の来臨する方角のことで、のちに暦術が入って、その年の歳徳神のいる方角をいい、この方角は毎年変わります。

アマテラス誕生の様子を『楽しい古事記』（阿刀田高）は次のように記している。

「イザナミの命を比良坂で振り切ったイザナギ

の命は身震いをして、

「ああ、すっかり体がけがれてしまった。身を清めよう」

と、太陽の美しい日向の国へ向った。現在の宮崎県のどこか。大河が海へ“注ぐ”、河口まで来て、身につけているものをどんどん払い捨て、脱ぎ捨てた。杖、帯、もの入れの袋、袴、冠、腕輪……捨てるたびに神々が生まれた。

すっかり裸になると潮の流れに身を沈め、体の汚れを洗った。ここでもさまざまな神々が誕生する。そして最後に水からあがって目と鼻を洗った。

左の目からはアマテラス大御神、右の目からはツクヨミの命、そして鼻からはスサノオの命が生まれ落ちた。……」

大河が海へ“注ぐ”、河口を、五ヶ瀬川（延岡港）と仮定する。上流はあの天孫降臨の高千穂町で天の岩戸も近い。ここから恵那山まで直線距離でざっと630km、この間のみならず九州、沖縄を含めて最も高い。恵那山は、美濃国以西の最高峰だ。「この程度で、驚くことはありません！」

黄泉の国へイザナミを訪ねたイザナギが、命から逃げ出してきた比良坂は、伊布夜坂とも呼ばれ、現在の鳥根県東出雲町の揖屋神社のあたりにあったと言われている。和紙造りで名高い阿部栄四郎記念館からそう遠い距離ではない。（『楽しい古事記』）

ちなみに、ここからミソギをしてケガレを落としたと思われる延岡まで、同じく直線距離で340kmほどである。タチカラオは、天の岩戸を戸隠神社（長野県上水内郡）まで約750kmを一気に投げ飛ばしている。何せ神様はスケールが大きい。

「しかしなア、高さをいうならナ、恵那山から伊那谷を越したわずが先（延長線上約60km）にはナ、赤石山脈の3000m級の山々が連なっているんじゃろが……」

「なあ～にイ、御神胞の納期は5日ないしは7日と決められているんだヨ。それになア、埋めた後にはナ、笑って帰らなければならないのサ。いくら神様でもそりゃちときついワナ」

「しからは白山（岐阜・石川県境）はどうなんじゃ。たとえ僅かであってもナ、近く（約30km）で高いんじゃないのか？」

「そうも考えてみたんじゃがナ、残念ながら方角が少し合わなかったんじゃヨ。吉方から30度ばかり北にそれとってなア」……だっんだとサ。

天照大御神 はたおり
アマテラスと機織

父イザナギの命から命じられた海の統治を怠

り、乱暴ばかり働くスサノオの命は、ついに神々の国・高天原から追放されることになってしまった。

姉アマテラス大御神に別れの挨拶に行ったスサノオは、ここでも腹いせにアマテラスが作った田んぼの畔を切ったり、食堂に糞を撒き散らすなど乱暴を働き、悪事を重ねることになる。『楽しい古事記』は、この様子をさらに次のように記している。

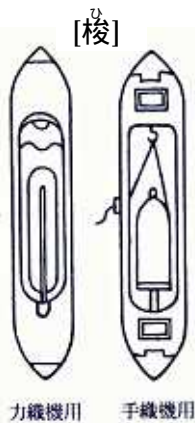
「アマテラス大御神が機織場に赴いて織女たちに神々の衣裳を織らせていると知るや、機織場の屋根に昇り穴を開け、皮を剥いだ血だらけの馬を投げ落とした。

「きゃーッ」

織女の一人が驚きのあまり機織具の梭で下腹を刺して死んでしまう。

なんてことを

あまりの狼藉にアマテラス大御神はどうしてよいかわからず、嘆き悲しんで天の岩戸の奥へ引き籠ってしまった。……」



梭は、シャトル(シャトル)といわれている。織機用具の一つで、製織の際、経(たて)糸の開口した間を左右に飛走して緯(よこ)糸を通す操作に用いるもので、飛びやすいように流線形をしている。アメリカで開発され、1981年に試験飛行に成功した、反復使用可能な宇宙往復用の有人宇宙船は、スペース(宇宙空間)シャトルと呼ばれている。近距離を一定間隔で往復運行するシャトルバスなど、シャトルの語源は、この梭からきたのであろう。

これが、わが国文献による織物の初出ではないだろうか。だとすれば、日本最初の織姫は、アマテラスということになる。

絹織物業の発祥地は中国で、紀元前3000年ころ、黄帝とその妃の西陵氏が、養蚕および絹織物の術を教えひろめたといわれている。

漢の武帝によってシルクロードがひらかれるのは、前2世紀の末であり、絹織物業が朝鮮を経てわが国に伝えられるのは200年ころといわれている。その後、歴代天皇の奨励によって民間に普及していった。

しかしこれは庶民のものでも、日常のものでもない。日常庶民の衣服材料の主なものは、フジ、コウゾ、シナノキなどの繊維のほか、麻がもっぱら用いられてきた。わが国で綿花栽培がはじまるのは、鎌倉中期から室町時代(13~15世紀)のころといわれ、もめんが普及するのは室町時代

末から江戸時代になってからである。

旧暦7月7日の七夕は、年中行事として中国を中心に、日本・韓国でも広く行われている。牽牛星(わし座の星アルタイル)と織女星(こと座の星ベガ)とが天の川をへだてて対するという伝説は、孔子(前551~前479)の編ともいわれる中国最古の詩集である詩経に既に載っている。

この2つの星を恋人に見立てることは、後漢時代の古詩にはじまり、さらに年に1度、7月7日の夜に逢瀬を楽しむという話は、六朝(240~589)の文献である擬天問や風土記にはじめてあらわれる。おそらく時代が下がるにつれて伝説の内容も豊富になっていったのであろう。

中国の七夕伝説では、織女星が華麗な車に乗って、鵲の掛橋を渡って、威風堂々と彦星のもとにやってくるのは織女星だった。しかしこれは日本の習俗に合わないため、渡河する星を彦星とし、逢瀬を待つ星を織女星に変更されたという。

中国の星祭は古く日本に移され、すでに万葉集にもその歌が約130首ほど見え、その巻8には、山上憶良の「七夕歌十二首」も載っている。

はじめ星祭は宮廷貴族の生活に伝えられ、書道の上達や恋愛の成就などを祈る風ともなった。江戸幕府はこれを年中行事にとりあげ、武家の風習ともなったので、しだいに庶民へも普及していった。

アマテラスと卑弥呼

アマテラスが、いつ生まれたかは不明だ。あえて言えばそれは、「むかしむかし」としか云いようが無い。

神武天皇の即位が紀元前660年で、天孫降臨のニニギはその曾祖父にあたり、さらにその祖母がアマテラスといわれている。これから計算すれば、アマテラスの生誕は縄文時代晩期まで遡ってしまうことになる。

高天原を追放されたスサノオは、斐伊川から流れてくる一本の箸を見て八岐の大蛇を退治することになる。稲作と養蚕はセットともいわれている。

『魏志倭人伝』には、女王卑弥呼が魏の都洛陽に使者を送り、斑布と奴隷(生口)を献上したことが載っている。西暦239年6月のことだ。

昭和61年からの発掘で、弥生時代の大規模な環濠集落跡や墳丘墓などが発見され、魏志倭人伝の記述との関係で注目された吉野ケ里遺跡からは、彩色した絹が出土したといわれている。正にアマテラスの機織りと一致しているではないか。

卑弥呼の誕生年月日は確定できない。黒岩重吾氏は『古代浪漫紀行』で、「卑弥呼が邪馬台国の女王となるのは紀元200年前後で、その時彼女は20歳前後のころではないかと想像している」と述べている。いずれにしても亡くなるのは3世紀半ばの248年（魏志倭人伝）だ。即ち弥生時代後期となる。

『逆説の日本史』（井沢元彦）は、アマテラスのモデルは卑弥呼、即ちアマテラス＝卑弥呼だと記している。

スサノオのあまりの狼藉にとうとう怒り心頭に達したアマテラスは、ついに天岩戸の奥へ隠れてしまった。さあ、大変！世界は真っ暗だ。

この話は皆既日食で、しかもアマテラスの死を意味している。と井沢氏は述べ、さらに次のように記している。

日本で国の存在が史料上で初めて確認できるのは、九州の志賀島（福岡市）で発見された「漢倭奴国王印」で有名な「奴国」である。この金印が後漢の光武帝から授けられるのは、紀元57年で1世紀のことだ。齊藤国治氏（『古天文学への道』）によれば、1世紀から邪馬台国の時代までに、日本列島上で観測できた皆既食は158年7月13日と248年9月5日の2回だけで、その次は454年8月10日である。天岩戸隠れが日食ではないかということは、江戸時代の儒学者荻生徂徠が言い出したことらしい。・・・と。

御神胞が納められるのは、今から1800年ほど前の弥生時代後期と考えるのが妥当ではないかと思えてくる。

ヤマトタケルのこと

天照大神が大和の笠縫村に祭られるのは崇神天皇の時、その地に磯城（石で築いた祭場）をめ



神籬

ぐらしかつ、神籬を立て、その後垂仁天皇の26年、伊勢国度会郡に移し祀ると日本書紀は載せている。

記紀伝承上の崇神天皇（第10代）は、実在した最古の天皇ともいわれ、垂仁天皇の父で、景行天皇の祖父でもある。父の

命を奉じて熊襲を討ち、のちに東国を平定した古代伝説上の英雄ヤマトタケルノミコトは、景行天皇の皇子という設定になっている。

奈良県天理市石上神宮に古くから伝わる鉄剣



七支刀

七支刀は、日本書紀に載る七支刀に当たるとされ、銘文から4世紀後半に百済で造られた。といわれる。

『古代の東アジアと日本』（佐伯有清）によれば、七支刀（372年）の銘文にみえる倭王の旨は、景行であったと考えられる。と記している。

熊襲を討ったタケルが、曾祖父垂仁天皇の移した伊勢神宮に参拝し、東国へ向うのはこの頃ではないだろうか。ミコトは、尾張・駿河・相模・総国を平定し、日高見国（北上川下流の仙台平野）から常陸を経て甲斐、さらに武蔵・上野をめぐって信濃に入っている。

科野坂が、神の御坂（神坂）と呼ばれるようになるのはこの時からといわれている。天照大神の御神胞が恵那山に納められてから、ざっと200年ほど後という計算となる。

（2007年9月7日）

参考文献 『世界大百科事典』

【国際惑星地球年】 今年（2007-2009）は国際惑星地球年（2007-2009）の中心の年です。恵那山学会もこれを記念して、ささやかでも、何か行事を行うと面白いのではないのでしょうか。

国際惑星地球年は、地球の過去・現在・未来を研究する科学者達の国際組織である国際地質科学連合（IUGS）とユネスコを中心に、多くの賛同者・後援者によって推進される国際的プログラムです。

2005年の第60回国連総会は2008年を国際惑星地球年としました。国連に参加する181もの国や地域が、そして地球上に住む人々が、地球と人類の持続可能な未来のためには地球科学の知識と技術が欠かせないことを広く知り、それを積極的に活用するためにです。

国際惑星地球年は「社会のための地球科学」を標語として、国連による国際惑星地球年2008を中心とする2007年から2009の3ヶ年を惑星地球の3ヶ年として、様々な活動に取り組みます。活動の大きな柱はアウトリーチプログラムとサイエンスプログラムの2つです。地球科学が、どのようにして社会的課題の解決を可能とするか、また人々がどのようにしてそれをよく知り、親しむことができるか、解決の可能性・潜在性と認知の波及性にむけて取り組むプログラムです。（<http://www.gsj.jp/iype/do/index.html>）

（金井）